

クリシュナムルティの生涯と思想

——仏教との比較の観点から——

平井節代

目次

はじめに

第一章 クリシュナムルティの生涯——今日の思想に到るまで——

第一節 クリシュナムルティの略歴

第二節 クリシュナムルティの宗教体験

第一項 宗教体験の始まり（一九三二年八月）

第二項 プロセスの頂点（一九三二年八月—一九三五年二月）

第三項 ニティヤの死（一九三五年三月—一九三六年十二月）

第四項 転機（一九三七年一月—一九三九年八月）

第五項 教団解散後（一九三九年八月—一九八〇年）

第二章 クリシュナムルティの思想

第一節 クリシュナムルティによる人間の観察

第一項 人間の心

第二項 意識の働き

第三項 人間の生

第四項 宗教的伝統

a) 宗教の伝統

b) 瞑想の伝統

第五項 人間の社会

クリシュナムルティの生涯と思想

第二節 クリシュナムルティの理想

第一項 瞑想

a) あるがままの観察

b) 主客の一致

第二項 真理

a) 日常の真理

b) 究極的真理

第三項 あるがままの観察の動機

まとめと結論

序論

クリシュナムルティ (Jiddu Krishnamurti 1895-1986) は、現代インドの宗教家である。インド哲学の特殊な用語を用いないで、その本質的な思想を端的に説くとして、インドのみならず、広く欧米で共鳴者を得た。

クリシュナムルティの思想は、従来の研究でも仏教思想と対比され、その類似が指摘されてきた。しかし、クリシュナムルティが体系だった思想を説かなかったことから、その比較は部分的なものにとどまっていたと言える。それで本稿ではクリシュナムルティの思想を体系的に捉えることを試み、その上で仏教と対比させてみた。

またクリシュナムルティの思想が、どのような過程を経て成立したのかということについて、特に宗教体験と言動の変化に注目して記録を辿り、考察を加えている。

本論に入る前に、クリシュナムルティの基本的な見解を要約して

紹介しておく。

「人は、いかなる組織によっても、いかなる信条によっても、いかなる教義や聖職者によっても、儀式によっても真理に達することはできない。真理は、ただ自己認識を通してのみ見出すことができる。」

本 論

クリシュナムルティの思想に大きな影響を与えたのは、一九二二年に始まる宗教体験であると言われている。しかしクリシュナムルティの言動が、今日知られている思想と照らし合わせて矛盾しないものになるのは、宗教体験が始まって五年後の一九二七年中頃であり、思想を決定付ける宗教体験はこの時期にあったと考えられる。

この時期に到達した境地を、クリシュナムルティ自身は、「解放 (liberation)」また「融合 (union)」と表現している。

「融合」の神秘体験は、他の宗教家によってもその記録が残されており、クリシュナムルティに限られたものではないと言える。これがクリシュナムルティでは、「解放」の結果としてもたらされている。ここから、条件付けからの解放、延いては伝統の否定が説かれるようになったと考えられる。

クリシュナムルティの思想は、宗教体験に基づくと考えられるが、神秘主義的な印象は薄いと言える。それは「融合」の体験ではなく、「解放」に焦点が合わせられているからではないかと考えられる。

ところで、クリシュナムルティの宗教体験には、肉体的な苦痛を伴うものが含まれ、これが生涯に渡って断続的に起こっている。この苦痛を伴う宗教体験と思想の関係については、明確にならなかった。

次に思想の内容について見てみよう。

クリシュナムルティは、人間とその精神を、「過去の結果 (result of the past)」と言い表している。過去の経験、成長した環境や文化、受けた教育等が、人間の思考パターンに影響していることは疑いない。

人間は各々異なる環境で、様々な経験を経て成育しており、また生まれ持った性質も異なることから、全く同じ人間はいないと考えられる。しかしクリシュナムルティは、何かなるようになるように条件付けられている点で、どの人間の精神活動も変わりがないと見なす。そして人間の日常生活を、過去に条件付けられた精神の働きに基づき、未来に「何かなるようになる過程 (a process of becoming something)」と見なしている。

「何かなるようになる過程」は、「あるがままのもの (what is)」と「あるべきもの (what should be)」の隔たりを生じさせ、自己の内部の矛盾や葛藤を引き起こす。それだけではなく、「私 (I)」や「私のもの (me)」の意識を強め、自己と他の分離をもたらしと見なされている。このような理由から、普通は歓迎される「理想」や

「目標」といったものも、クリシュナムルティでは弊害を生むものとして認識される。また「欲望を離れたい」という宗教的な望みも、聖俗分けることなく、自我の働きに基づくものとして否定されている。このような見解を根拠に、クリシュナムルティのあらゆる宗教的伝統を否定する立場が形成されている。

人間の様々な問題の根源が、「私」や「私のもの」という意識であり、「あるべきもの」の理想像であり、さらにそれを生むのが過去に条件付けられ「何かになるうとする」精神活動であるとするならば、そのような条件付けからの解放が、問題の解消をもたらすと考えられる。そして、どのような方法でそれが実現するのかが問われる。

これに関してクリシュナムルティは、ただ「あるがままのもの」を、思考を挟まずに受動的に知覚すること (to be passively aware) の重要性を説いている。この「あるがままの観察」すなわち自己認識が、クリシュナムルティにとっての瞑想の出発点である。「あるがままの観察」において、条件付けされた自己の思考の働きを理解し、最終的に「観察者 (the observer)」が「観察されるもの (the observed)」であるという認識に到ったときに、精神には静寂がもたらされ、その静寂の中に「真理 (Truth)」が現れるとしている。

この過程において、過去からの条件付けからは解放され、自我の働きを中心としない創造的な行為が実現すると言う。

ところで、「条件付けから解放されたい」あるいは「真理を見出

したい」という欲求も、自我の働きに基づくと言える。クリシュナムルティは、目的や結果を念頭においた瞑想を否定しているが、それではこの「あるがままの観察」はどのような動機で行なわれるか。クリシュナムルティは「完全な不満 (total discontent)」をその動因として挙げている。

またクリシュナムルティは、思考の働きによる自他の分離の弊害を言っているが、実際にはクリシュナムルティの思想も、思考の働きによって学ばれている。クリシュナムルティ自身が期待するしなに関わらず、「伝統を否定する者」と「伝統を支持する者」、またクリシュナムルティを支持する者としての者、これらの間に分離が生じる可能性も否定できないのではないかという疑問が出てくる。

これに関しては、クリシュナムルティは、自分の支持者が、自身の言葉を借りて伝統の否定を主張することを求めている。ただ「あるがままのもの」を観察することが促されているだけである。「あるがままのもの」を観察し、伝統の弊害を認識した者が、それを離れることから問題は生じない。そうでなければ「伝統の否定」に捕らわれることで、新たな問題を生む結果になる。

結 論

仏教との対比ということで、新たに分かったことは、あらゆる事物が、時間的にも空間的にも互いの条件付けによって成り立つということは、仏教でも縁起説として説かれており、クリシュナムルティ

イと仏教の基本的なスタンスは同じであると言えること。また「我」や「我がもの」といった我執を問題とし、それからの解放の必要が説かれることについても相違ないことである。

従来の研究では、「伝統の否定」と「あるがままの観察」について仏教との類似が指摘されてきた。「伝統の否定」に関しては、クリシュナムルティ自身が、新たな伝統の構築につながる可能性のあるものを出来る限り排除する姿勢をとっており、この徹底さが仏教では見られないものであると言える。「あるがままの観察」の必要が説かれることでは、両者とも変わらないと言える。

クリシュナムルティが、仏教者や仏教学者と対話をしたという記録がある。今後その内容の詳しい資料が紹介されれば、宗教的伝統を否定する者としてではなく、あるがままのものがあるがままに指摘する者として、仏教徒にもクリシュナムルティの思想が認められる可能性が出てくるのではないかと思う。

台密形成における一大円教論

大 谷 欣 裕

目 次

序 論 本 論

第一章 慈覚大師円仁の教判論

第一節 円仁の教判論について（一大円教論と顕密二教判）

第二節 『金剛頂経疏』所説の一大円教論とは

第三節 『蘇悉地経疏』の顕密二教判について

第二章 円仁教学に於ける問題点

第一項 『金剛頂経疏』に於ける顕密二教判の指摘

第二項 顕密二教判に於ける問題（『金剛頂経疏』所説の

随自意・随他意の観点より）

第三章 智証大師円珍の台密教義について

第一節 円珍教学に於ける一大円教論の展開について

第二節 『大日経指帰』について

第一項 『唐決』の内容

第二項 『大日経指帰』所説の五時教判と十住心批判

第三節 円珍教学に於ける諸問題

第一項 『大日経指帰』の円密観と一大円教論に対する従

来の研究

第二項 従来の問題に対する私考

第三章 五大院安然の教判論